

22-2. 諫早南部第1地区土地区画整理事業地内遺跡確認調査（第2次）

1. 調査地 諫早市上野町1127番地ほか
2. 調査原因 土地区画整理事業
3. 調査期間 平成18年2月7日～3月24日
4. 調査面積 129m²
5. 調査区分 確認調査
6. 調査後措置 調査後協議
7. 調査担当者 秀島 貞康

1. 遺跡の立地と環境

第1次に同じ

2. 調査の記録

①上野町1127-1・2番地

[立地] 調査対象域は市街地南部を南北に縦断する通称「上町通り」の1街区東側に位置し、前記の通りには接していない。1127-1・2番地の地形を考慮してトレンチ（約100m²）を設定する。調査地点の東限はブロック塀で現徳養寺と接しているが、接線から以東（1116、1117番地）は地形が急に落ちており、自然のものではない。字図によれば1117番地は北側で用水路に接し、また南に接する1116番地は字図の書き込みから北側に等高線が回る、すなわち浅い谷地形を示すように見て取れ、該当地にはかつて池沼があったものと推測される。事実1116番地において浄化槽工事を行った時の湧水の量はひどく、難工事であったという。

[土層] もとは畑として利用されていた土地で、土層断面は次のように堆積している。

第1層 耕作土で黒色を呈する。かなりの深度を有している。

第2層 褐色土で炭化物、赤色粒子を含む。遺物包含層で往時の整地層である。地形に沿って東に深くなっており、締りがあって硬い。この上面で遺構が確認されるものがある。

第3層 茶白色の凝灰岩風化土と見られる基盤層である。遺構検出面はこの層の上面であるが、ピット等の残り具合からかなりの上面の掘削があったものと思われる。

第4層 安山岩火砕泥流層

[検出遺構] 検出された遺構は次のとおりである。

	ピット		その他遺構
	8	9	
B	11	15	落ち込み
C	27	29	
D	5	12	

ピットは径が30cm前後のものが多く、またC-9トレンチのピット9からは片へら切り鎬蓮弁の青磁碗が出土し、13世紀前後の建物群が存在することが確実となった。建物遺構の性格や規模などは今後の調査に委ねられるが、律令期以降官衙的な施設や、また南北朝期には船越城が立地したところであり、より広範な調査での遺構の把握が求められる。

このピット群が分布する地点はもともと1127番地であるが、西隣の1126番地には当該期のピット群の存在が認められず、地番による土地利用の区分が明確であることが知られた。このような現象は尾和谷城跡でも確認されており、往時における土地利用の様子が見て取れる好例であろう。

②上野町1159番地

[立地] 「上町通り」に面し、西接している。

[土層] 長年にわたって居住域として利用されたため、かなりの深度まで攪乱が及んでいる。しかし土層の保存状態が良好な部分も確認される。基本的な層順は

第1層 表土及び攪乱層

第2層 茶褐色粘土層で遺構検出面である。

第3層 茶白色の凝灰岩風化土と見られる基盤層が存在する模様であるが、設定したトレンチでは安定した土層の確認はできていない。

第4層 安山岩火砕泥流層

となる。

[検出遺構] 茶褐色粘土層上面及び層中に炭化物や焼土塊を含む層を検出した。遺構の範囲や機能は現在のところ明確でないが、層中に土師器のみを含む一定の範囲を検出しており今後の精査により明確になるものと思われる。土師器の所属時期は明確でないが、底径が大きい点など特徴があり、今後の課題である。

3. 調査所見

前年度から実施している遺跡存否確認調査で、建物遺構等の捕捉ができ中世期までは確認できた。さらに律令期の遺構の検出や、古代からの土地利用の捕捉ができるよう、調査の継続を実施する予定である。

23. 開遺跡 (ひらきいせき)

1. 調査地 諫早市飯盛町1915-1
2. 調査原因 店舗建設
3. 調査期間 平成17年6月3日
4. 調査面積 10m²
5. 調査区分 範囲確認調査
6. 調査後措置 工事実施
7. 調査担当者 川瀬 雄一

1. 遺跡の立地と環境

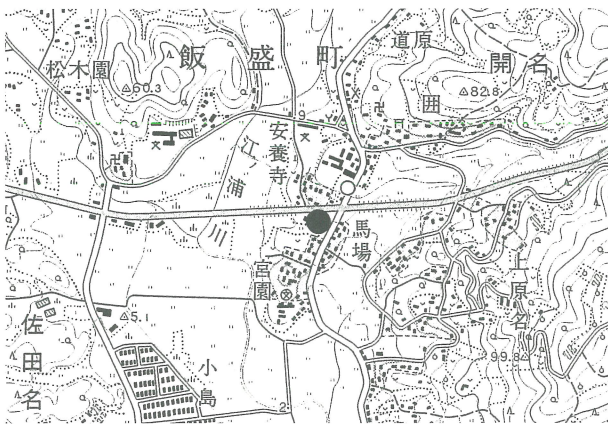
標高15mほどの舌状台地に位置する。周辺には囲城跡、岡城跡など中世の遺跡が点在する。昭和46年(1971)の国道251号拡幅工事の際に、長崎県教育委員会が本調査を実施、ピット群などの遺構、土師質土器、須恵器、青磁、滑石製品などが検出され、遺跡が中世の集落跡であった可能性が指摘されている(『長崎県埋蔵文化財調査集報V 1982』)。その後、県道諫早飯盛線拡幅工事に伴って、長崎県教育委員会が平成16年度に範囲確認調査実施、平成18年度に本調査を実施している。

2. 調査の記録

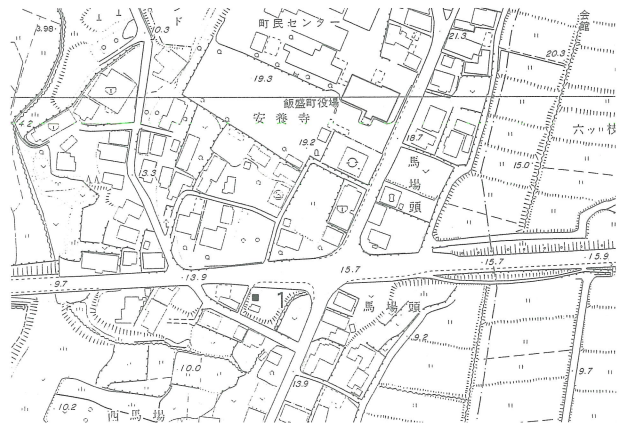
調査地の現況は店舗跡でアスファルト敷きである。深く掘削を行う浄化槽の設置箇所を調査対象とした。重機により掘削を行ったが、埋土が1.8mほどなされており、この下に旧水田面が確認された。国道251号線北側での発掘調査では、地表下50cmで地山に到達していることから、国道を挟んで南側はかなり急激に落ち込んでいることが考えられる。

3. 調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったため、本調査は不要と判断した。



調査位置図 (S-1/25,000)



トレンチ配置図 (S-1/5,000)

24. 小栗B地点遺跡（おぐりBちてんいせき）

1. 調査地 諫早市小川町214-1
2. 調査原因 携帯電話中継局建設
3. 調査期間 平成17年6月21日～22日
4. 調査面積 28m²
5. 調査区分 範囲確認調査
6. 調査後措置 工事実施
7. 調査担当者 川瀬 雄一

1. 遺跡の立地と環境

今回の調査地は、国道57号線の南側にある丘陵の頂上部にある。標高は46mで、現況は墓地である。頂上部から東側に下がった標高30mほどの斜面上において、長崎県教育委員会、諫早市教育委員会により過去に発掘調査が行われている（『小栗B遺跡』長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅷ、長崎県文化財調査報告書第75集 長崎県教育委員会 1985、『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第4集 諫早市教育委員会 1983）。調査では、弥生時代中期の甕棺墓・古墳時代の箱式石棺墓・中世の土壇墓などが確認されている。

2. 調査の記録

1～5 Tを設定。表土直下で地山が検出されており、包含層が既に流失していると思われる。

3. 調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったため、本調査は不要と判断した。



調査位置図 (S-1/25,000)



トレンチ配置図 (S-1/5,000)

25. 周知外遺跡①

1. 調査地 諫早市貝津町1595-1ほか
2. 調査原因 店舗建設
3. 調査期間 平成17年6月30日
4. 調査面積 40m²
5. 調査区分 試掘調査
6. 調査後措置 工事実施
7. 調査担当者 川瀬 雄一

1. 遺跡の立地と環境

調査地は国道34号線の北側、JR西諫早駅の西側にある。近隣には西諫早ニュータウンがあり、長崎方面および大村方面への交通量も多い。近隣には諫早インターチェンジや工業団地があり、終日交通量の絶えない地域である。標高は10m。

2. 調査の記録

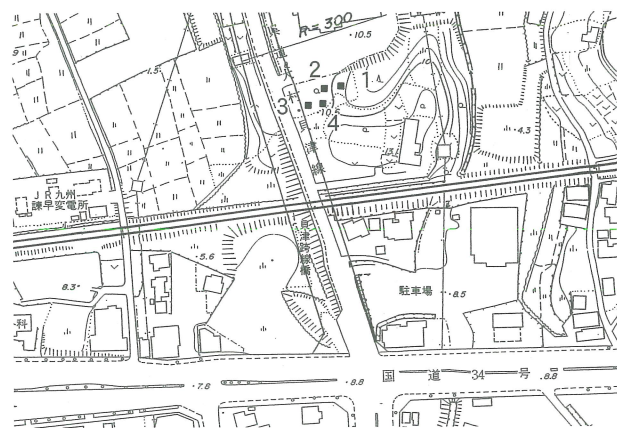
包蔵地外であるが、かつて箱式石棺墓が出土した貝津横島A遺跡の立地に近いと思われるので、事前の調査を実施した。5×2mのトレンチを4箇所設定し、重機による掘削を実施。いずれのトレンチでも埋土が厚くなされており、もともとは4～5mほど下がった谷地形であったところを平坦地に造成した状況が看取された。地表面から2mほど掘り下げたが、危険防止のため、それ以上の掘削は行わなかった。

3. 調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったため、本調査は不要と判断した。



調査位置図 (S-1/25,000)



トレンチ配置図 (S-1/5,000)

26. 小栗A地点遺跡（おぐりAちてんいせき）

1. 調査地 諫早市小川町201-1ほか
2. 調査原因 共同住宅建設
3. 調査期間 平成17年7月25日～29日
4. 調査面積 27m²
5. 調査区分 範囲確認調査
6. 調査後措置 工事实施
7. 調査担当者 川瀬 雄一

1. 遺跡の立地と環境

調査地は標高46mほどの丘陵の西側斜面、標高30mほどに位置する。

東側斜面の標高30mほどの地点では長崎県教育委員会・諫早市教育委員会により過去に発掘調査が行われている（『小栗B遺跡』長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅷ、長崎県文化財調査報告書第75集 長崎県教育委員会 1985、『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第4集諫早市教育委員会 1983）。これらの調査では、弥生時代中期の甕棺墓・古墳時代の箱式石棺墓・中世の土壇墓などが確認されている。

2. 調査の記録

3×3mのトレンチを3箇所設定した。1Tと3Tにおいては表土下に赤褐色粘質土があり、この層は無遺物層である。2Tでは表土下に1T・3Tでは見られない褐色粘質土がある。この層には、弥生時代中期の土器（丹塗り土器を含む）や近世の陶磁器が混在しているという状況である。

3. 調査所見

2Tにおいて弥生時代中期の土器を中心とした遺物が出土したが、すでに後世の攪乱を受けており、プライマリーな状況ではなかったため、本調査は不要と判断した。ただし、土器の出土量等から、周辺には包含層や遺構が残っていることが十分に予測されるので、今後の周辺での開発には注意を要する。



調査位置図 (S-1/25,000)



トレンチ配置図 (S-1/5,000)

27. 周知外遺跡②

1. 調査地 諫早市長野町1168-2ほか
2. 調査原因 携帯電話中継局建設
3. 調査期間 平成17年10月19日～20日
4. 調査面積 4 m²
5. 調査区分 試掘調査
6. 調査後措置 工事実施
7. 調査担当者 川瀬 雄一

1. 遺跡の立地と環境

長野城跡は南北朝初期の築城と考えられており、郭・石垣が残存している。標高100mほどにあり、城主は宗像氏あるいは長野氏と考えられている。

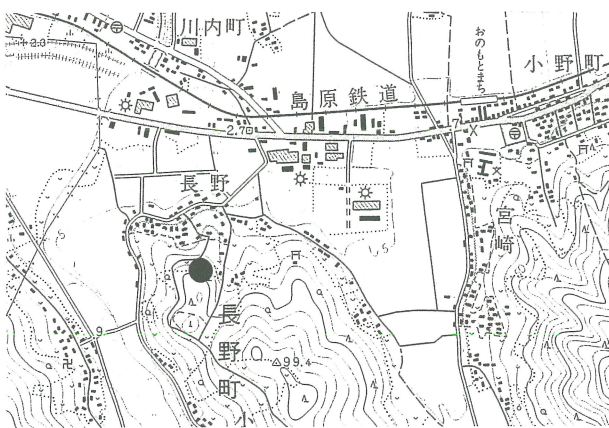
今回調査地の現況は畑で、長野城から南側に下がった標高50mのところにある。長野城跡関連の遺構が残っていることが想定されるため、試掘調査を行った。

2. 調査の記録

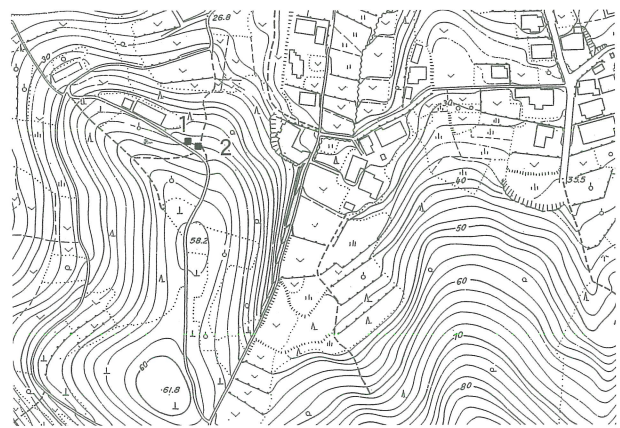
調査は2×2mのトレンチを2箇所設定して行った。1層-茶褐色土、2層-安山岩風化礫層である。

3. 調査所見

遺物包含層・遺構は確認されなかったため、本調査は不要と判断した。



調査位置図 (S-1/25,000)



トレンチ配置図 (S-1/5,000)

3 開発に伴う本調査 (有喜・上原遺跡)

30・31. 有喜・上原遺跡 (うき・うえはらいせき)

例 言

1. 有喜・上原遺跡は諫早市松里町114-2に所在する。
2. 調査期間は ①試掘調査 平成16年10月27日～11月2日
②本調査 平成17年3月2日～3月30日
平成17年4月11日～6月10日
で実施した。
3. 調査面積は①試掘調査40m²、②本調査250m²である。
4. 調査によって検出した遺物類、調査及び整理作業にかかる図面・写真類は諫早市教育委員会が管理し、諫早市郷土館で保管している。
5. 本書に使用したレベルは海拔高であり、方位は磁北である。
6. 発掘調査は諫早市教育委員会が実施した。
教 育 長 峰松 終止 教育次長 平野 博
文化課長 松本 玉記 参 事 永 渕 高信
課長補佐 川内 順史
参 事 秀島 貞康 (本調査、整理・報告書作成担当)
事務職員 川瀬 雄一 (範囲確認調査担当)
調 査 員 古賀 力 (本調査、整理・報告書作成担当)
調 査 員 橋本 幸男 (本調査、整理・報告書作成担当)
7. 本書の執筆は石器について古賀が担当し、その他は秀島が行った。
8. 本書は秀島が編集した。

本 文 目 次

I. 遺跡の立地と歴史的環境	125
II. 調査の経過	129
1. 試掘調査	129
2. 本調査	130
III. 調査の記録	132
1. 1号甕棺墓	132
2. 2号甕棺墓	132
3. 3号甕棺墓	134
4. 1号竪穴住居跡	139
5. 2号竪穴住居跡	142

6. 土壌	154
- 1. 1号土壌	154
- 2. 2号土壌	154
- 3. 3号土壌	156
7. 円礫集石遺構	157
8. 建物	157
- 1. 建物 1	157
- 2. 建物 2	157
- 3. 建物 3	162
- 4. 塀又は柵列	163
- 5. その他の柱穴	163
9. その他の出土遺物	165
IV. 総括	167

挿 図 目 次

第1図 有喜・上原遺跡及び周辺遺跡分布図 (S-1/37,500)	126
第2図 有喜・上原遺跡周辺地形図 (S-1/5,000)	127
第3図 調査区設定図 (S-1/200)	129
第4図 試掘5トレンチ遺構検出図 (S-1/40)	130
第5図 遺構配置図 (S-1/100)	131
第6図 1号甕棺墓実測図 (S-1/10)	133
第7図 2号甕棺墓実測図 (S-1/10)	134
第8図 3号甕棺墓実測図 (S-1/15)	135
第9図 1～3号甕棺実測図 (S-1/6)	136
第10図 1号竪穴住居跡実測図 (S-1/40)	137～138
第11図 1号竪穴住居跡炉跡実測図 (S-1/20)	140
第12図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (S-1/3)	141
第13図 1号竪穴住居跡出土石器実測図 (S-1/3)	142
第14図 2号竪穴住居跡実測図 (S-1/40)	143～144
第15図 2号竪穴住居跡炉跡及び土壌実測図 (S-1/20)	145
第16図 2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1～16) (S-1/3)	147
第17図 2号竪穴住居跡出土土器実測図 (17～39) (S-1/3)	149
第18図 2号竪穴住居跡出土土器実測図 (40～54) (S-1/3)	151
第19図 2号竪穴住居跡ほか出土遺物実測図 (1～6) (S-1/2)	153
第20図 2号竪穴住居跡出土石器実測図 (1～8) (1～4は2/3、5～8は1/3)	153
第21図 1～3号土壌、円礫集石遺構実測図 (S-1/20)	155
第22図 土壌、柱穴出土遺物実測図 (1～15) (15は1/6で、その他は1/3)	156

第23図	建物1、3実測図 (S-1/60).....	158
第24図	建物2、塀又は柵列実測図 (S-1/60).....	159
第25図	柱穴132遺物出土状況図 (S-1/5).....	160
第26図	柱穴132出土遺物実測図 (1~12) (S-1/3).....	161
第27図	その他の出土遺物実測図 (S-1/3).....	166

表 目 次

第1表	遺跡地名表	125
第2表	土器組成図	168
第3表	土器等属性一覧表①	170
第4表	土器等属性一覧表②	171
第5表	遺物出土柱穴一覧表①	172
第6表	遺物出土柱穴一覧表②	173

図 版 目 次

1-1	有喜・上原遺跡遠景 (南西より)	- 2	有喜・上原遺跡近景 (南西より)
2-1	試掘5トレンチ遺構検出状況 (南より)	- 2	1号甕棺墓 (南より)
3-1	2号甕棺墓 (南より)	- 2	3号甕棺墓 (南より)
4-1	3号甕棺墓掘方 (南より)		
- 2	調査区全景 (1・2号竪穴住居跡) (東より)		
5-1	1号竪穴住居跡 (南より)	- 2	2号竪穴住居跡 (南より)
6-1	2号竪穴住居跡遺物出土状況 (北より)	- 2	2号竪穴住居跡土層堆積状況 (東より)
7-1	1号土壌 (南より)	- 2	2号土壌 (青磁出土状況) (東より)
8-1	2号土壌墓石 (?) (第22図15) 検出状況 (南西より)		
- 2	2号土壌完掘状況 (壙底は柱穴163) (南より)		
9-1	3号土壌半掘状況 (西より)	- 2	円礫集石遺構検出状況 (南より)
10	1~3号甕棺		
11-1	1号竪穴住居跡出土土器 (1~19)	- 2	1号竪穴住居跡出土石器 (1~3)
- 3	2号竪穴住居跡出土土器 (1~8)	12	2号竪穴住居跡出土土器 (1~4)
13	2号竪穴住居跡出土土器 (5~23)	14	2号竪穴住居跡出土土器 (25~36)
15	2号竪穴住居跡出土土器 (37~49)		
16-1	2号竪穴住居跡出土遺物 (50~54)	- 2	2号竪穴住居跡ほか出土遺物 (1~6)
17	土壌、柱穴出土遺物 (1~15)		
18	柱穴132出土遺物 (1~12)		
19	その他の出土遺物 (1~19)		

I. 遺跡の立地と歴史的環境

有喜・上原遺跡は橘湾を望む標高24m前後の丘陵上に立地する。遺跡を載せる丘陵は有喜火山岩類の噴出で生じたもので、凝灰角礫岩類が分布している。丘陵は国道251号線を越えて北東側に伸びており、小烏帽子岳古墳を載せる山塊から派生する小さな支脈のひとつである。この丘陵の東側は浅い谷地形を示しており、河川等の浸食によって独立したものである。

遺跡の周辺は東に標高を逡減して伸びるものの、先年調査した松里公民館南側の結果によれば遺跡の延長は認められず、実に狭い範囲に遺跡が限られることが判明した。遺跡の東は断層崖が発達しているが、わずかに残る平坦面には多くの遺物が看取され、古くよりこの周辺の地形が改変されず今日に継続していることを承知するのである。この周辺から出土する遺物については桑山龍進が有喜岩崎貝塚として紹介（注1）し、また稲田三千年氏表採の資料を紹介（注2）した経緯がある。近傍には多くの遺跡が存在し、有喜貝塚（注3）は本遺跡より指呼の関係であり、また宇木（有喜）城（注4）も直線にして700mの位置である。

この遺跡を載せる低平な独立丘陵は小字で「上原」、小谷で隔てた北に接する小丘陵は小字で「陳（陣）の辻」と呼称し、かつて合戦があった場所と地元では伝えている。この陣の辻北側を旧島原街道が通行している。また南側には島原藩主が長崎巡視の折に通行した街道が東西走しており、周辺が交通の要衝として重要な地点を占めていたのである。確かに遺跡の西側は江ノ浦一千々石断崖の断層崖が接続し、水田との比高20m程を測る。このことから街道は南に迂回し、また島原街道は北進して森山方面へ進行している。よって地理的に諫早方面、森山一千々石方面、飯盛・長崎方面との接点に位置する狭隘部であり、古来より最重要地点であったことが首肯される。

宇木城については築城の時期がはっきりとしない。宇木氏関係と見られる資料の初出は「鎌

No	遺跡名	所在地	時代	No	遺跡名	所在地	時代
1	上原遺跡	諫早市松里町	弥生～中世	28	宮崎館遺跡	諫早市宗方町	旧石器～中世
2	上原貝塚	諫早市松里町	弥生後期～古墳	29	小野城跡	諫早市小野町	中世
3	六本松遺跡	諫早市松里町	縄文中期～弥生後期	30	水の手遺跡	諫早市宗方町	古墳
4	有喜貝塚	諫早市松里町	縄文中期～弥生後期	31	太郎丸遺跡	諫早市宗方町	弥生
5	宇木城跡	諫早市有喜町	南北朝期	32	市場遺跡	諫早市長野町	中世
6	鶴田城跡	諫早市鶴田町	南北朝期頃か	33	小野堀口遺跡	諫早市宗方町	縄文～中世
7	平の上遺跡	諫早市松里町	縄文	34	小野宗方遺跡	諫早市宗方町	縄文～弥生
8	熊野神社遺跡	諫早市松里町	中世～近世	35	小野糸里遺構	諫早市宗方町・長野町・小野町	縄文晩期～古代
9	有喜大久保遺跡	諫早市松里町	縄文	36	尾野大久保遺跡	諫早市長野町	縄文
10	小烏帽子岳古墳	諫早市松里町小烏帽子岳	古墳前期	37	崎田遺跡	諫早市長野町	弥生
11	椿川古墳群1号墳	諫早市森山町上井牟田	古墳後期	38	下組遺跡	諫早市長野町	縄文
12	椿川古墳群2号墳	諫早市森山町上井牟田	古墳後期	39	長野城跡	諫早市長野町	中世
13	椿川古墳群3号墳	諫早市森山町上井牟田	古墳後期	40	諫早農業高校遺跡	諫早市船越町・立石町	弥生～古墳
14	長坂古墳	諫早市森山町上井牟田	古墳後期	41	龜山古窯	諫早市西郷町	江戸～大正
15	木秀古墳	諫早市長野町木秀	古墳後期	42	十仙平遺跡	諫早市鷺崎町	縄文
16	柏原古墳群1号墳	諫早市森山町上井牟田	古墳後期	43	源内谷遺跡	諫早市鷺崎町	縄文
17	柏原古墳群2号墳	諫早市森山町上井牟田	古墳後期	44	小栗C地点遺跡	諫早市小川町	弥生
18	柏原古墳群3号墳	諫早市森山町上井牟田	古墳後期	45	小栗B地点遺跡	諫早市小川町	弥生
19	西ノ角遺跡	諫早市森山町上井牟田	弥生～古墳	46	小栗A遺跡	諫早市小川町	弥生
20	木正手遺跡	諫早市森山町上井牟田	古墳	47	小栗A地点遺跡	諫早市小川町	弥生
21	宗方古城	諫早市宗方町	南北朝期か	48	駄森積石塚	諫早市栗面町	
22	城跡	諫早市森山町下井牟田	近世か	49	土師野尾遺跡	諫早市土師野尾町	縄文
23	上丁軒遺跡	諫早市森山町慶師野		50	土師野尾古窯跡	諫早市土師野尾町	中世末
24	仁田野A遺跡	諫早市小野町	縄文	51	岡城跡	諫早市飯盛町野中	中世
25	黒崎城跡	諫早市黒崎町	中世	52	囲城跡	諫早市飯盛町囲	中世
26	内野遺跡	諫早市小野町	弥生	53	堤の端遺跡	諫早市天神町	縄文
27	小野貝塚	諫早市小野町	弥生	54	奈良山遺跡	諫早市早見町	弥生

第1表 遺跡地名表（第1図の番号に一致）



第1図 有喜・上原遺跡及び周辺遺跡分布図 (S-1/37,500)

倉殿侍別当（和田義盛？）下文」（注5）と見られ、元暦2（1185）年7月15日の文書である。壇ノ浦合戦後に肥前国御家人宛に出された門司関参会を催促する内容と見られ、御家人交名の知れる資料である。このなかに「（前略）値賀太郎 同八郎 宇木六郎大夫 同易太郎 大値賀四郎 （中略）伊佐早下司 永野太郎奉 大江六郎 小田藤太奉 宇木江五大夫 同江四郎奉 船越七郎奉（後略）」と見える。この御家人交名は一定の地域順に廻文しており、宇木江五大夫、同江四郎は伊佐早・有喜にいたものと想定される。また宇木氏を名乗る御家人が平戸・小値賀周辺に存在しており、宇木氏と松浦周辺の御家人との関係を示唆しているようで、今後の考究を待ちたい。この「下文」の記載が事実とすると宇木氏が構えたと想定される宇木城は平安末から鎌倉時代初期にはすでに存在していたと史料されよう。

次に宇木関係が資料に出るのは降って南北朝期である。江戸期に編纂された『九州治乱記（北肥戦誌）』（注6）には観応3（文和元、1352）の事として「夫より氏連、西郷二郎が杉峯城をも攻破りて井牟田を焼払い、宇木の城に押寄せ、爰をも不日に攻落しぬ」と記し、九州探題一色氏範が派遣した小俣氏連が攻めたことを記している。さらに、応安6（1373）年の条には「応安6年癸丑3月初、探題今川入道了俊・太宰右衛門佐頼泰、彼杵郡へ発向し、伊佐早・宇木の両城を攻めけるに、城主伊佐早右近五郎・西郷藤三郎やがて降参す。」と記している。明けて応安7（1374）年の記事には「然るに了俊、彼杵郡の一揆退治の爲め、今年3月29日、彼所へ打越え、先づ宇木の城を攻め、野伏と昼夜防戦し、4月28日、宮浦に陣を移し、7月23日、又伊佐早へ赴き、同25日、永野の城を攻め落として在家を放火し、船越城に入り、同28日、重ねて宇木の城を攻め、日々相戦ひ、8月2日には高来の陣を返さる。」と、幾度となく宇木城が攻略されたことを記している。またこの間の事情は『深堀時広軍忠状』（注7）等とも符合し、後には当地が論功の対象地ともなっていたことが次の文書によって窺われる。すなわち、『大友文書』康暦元（1379）年の記事には宇木小次郎、宗像八郎の所領である宇木の地を含めた永野が大友親世に勲功の賞として宛がわれている。しかし、その後も西郷氏は勢力を保ったようで文明年間（1469～87）頃西郷尚善は伊佐早まで進出し、船越城、高城を築城したとされる（注4）。さらに降って天正5（1577）年龍造寺隆信が侵攻した頃には西郷玄蕃允が城主であったが、龍造寺入封後は城代として木下安可を配置させるものの、その後は誌上にその存在を見出すことができなくなるのである。

注1. 桑山龍進「橘湾沿岸に於ける史前遺跡について」『長崎談叢』第18集 1936

注2. 秀島貞康「上原貝塚の採集遺物」『諫早史談』第13号 1981

注3. 諫早市教育委員会『有喜貝塚』1984

注4. 山部 淳「宇木城」『日本城郭体系』第17巻 1980

注5. 山口隼正「佐々木家文書—中世肥前国関係史料拾遺—」『九州史学』第125号 2000

注6. 肥前史談会『肥前叢書・第二輯』1973

注7. 深堀史跡保存会『鍋島藩深堀資料集成』1974など

II. 調査の経過

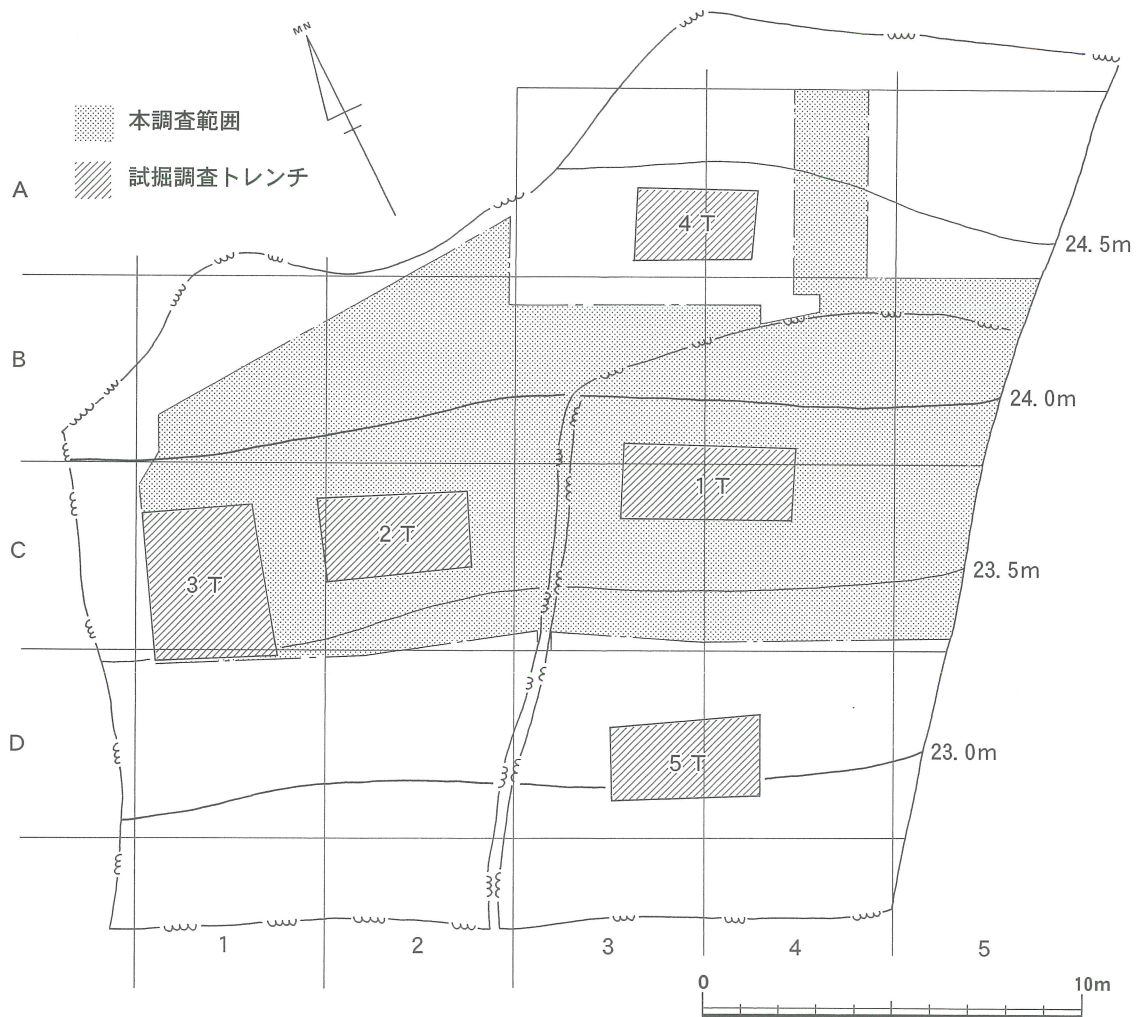
1. 試掘調査 (第3図)

試掘調査は南に面する緩斜面の全体について捕捉できるように、調査範囲内に2×4mの規模のトレンチを5箇所を設定し調査を実施した。その結果すべてのトレンチから包含層が確認され、また一部黒褐色を呈する粘質土が確認されたことから住居跡などの遺構の存在が想定された。このことにより遺跡の保存について協議を行い、保存ができない部分について本調査を実施することとした。

ここでは包含層を含めて現状保存される5トレンチの状況を説明する。

5トレンチ (第4図、図版2-1)

2×4mのトレンチで炉跡1箇所、柱穴6本を確認した。炉跡は東壁にかかって確認され、長軸35cm+、短軸45cm+、深さ25cm程の楕円形状を呈するようである。床面は平坦に造作され、約15cmの厚さに焼土と炭化物を包含した赤茶色粘質土が堆積している。上位には細かい焼土層の赤褐色粘質土が堆積している。この炉跡は柱穴6を切っており、このトレンチ内における前後関係を示している。柱穴の覆土はいずれも焼土や炭化物を含む黒褐色粘質土で、径20~25cm、深さは20cm前後を残している。



第3図 調査区設定図 (S-1/200)

2. 本調査 (第3図)

本調査は試掘調査の成果をもとにグリッドを切り直して調査を実施することとした。グリッドは5mメッシュに切り、南北をA～C列、東西を1～4列とし、グリッド4面に土層観察用の畦を残して調査を行った。この結果、試掘調査時の1～4トレンチは本調査の調査範囲内に包含されることとなった。

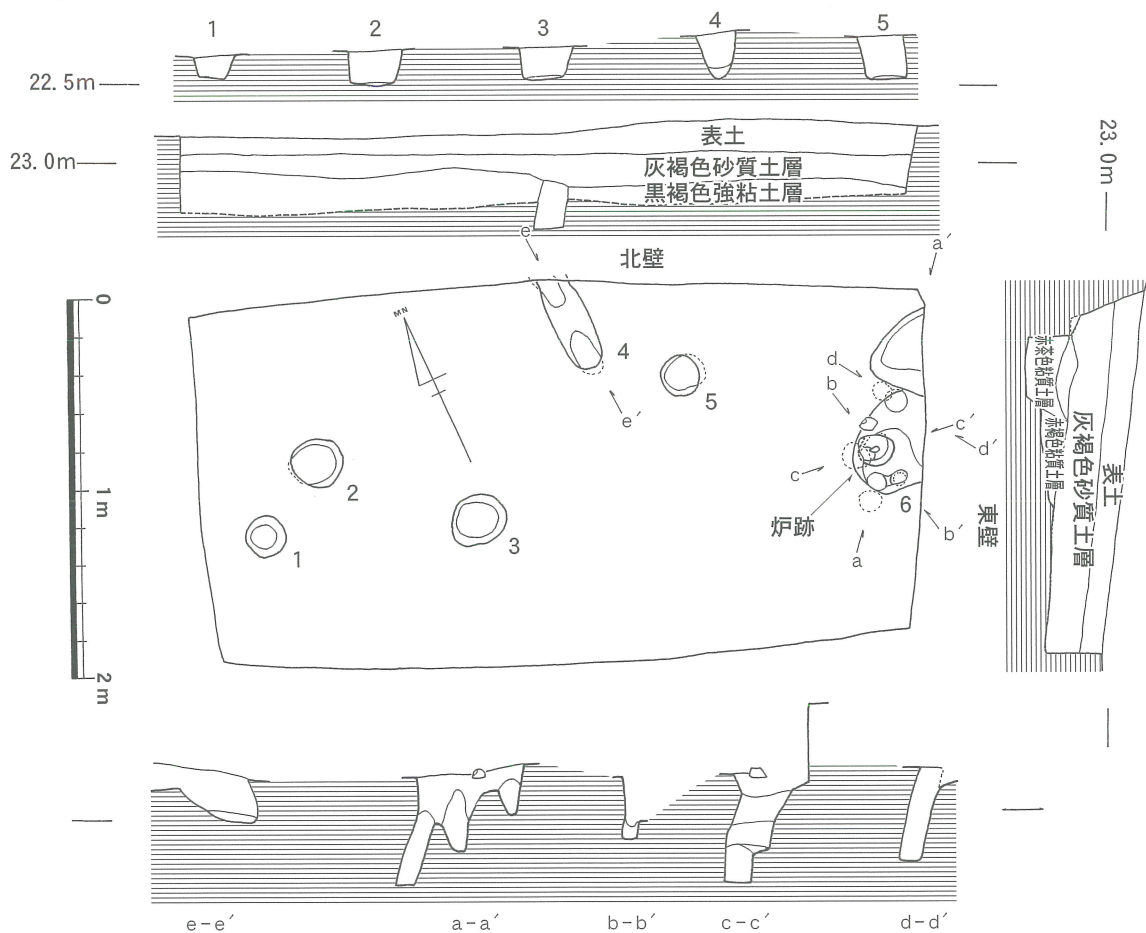
調査は表土層の除去から行い、包含層上位までは一括遺物として認識し、表層土出土としてトレンチごとに取り上げた。包含層以下の遺物は遺構出土と認識されるものについては1/10縮尺でドット・マップを作成し、出土標高を計測して取り上げた。

遺構は1/10縮尺で作図し、必要に応じ1/5、あるいは1/2縮尺の図面も作成した。

遺構の検出状況や完掘状況、遺物の出土状況等の写真は35mmの白黒・リバーサル、6×9判の白黒・リバーサルで行った。

また、レベルは国道57号線の標高を援用して移動し、使用することとした。

調査の結果、甕棺墓3基、竪穴住居跡2棟、土壇3基、円礫集石1基、建物3棟、柵又は塀列1列、柱穴163本を検出・確認し、長期に亘り埋葬域あるいは生活域として利用された土地・空間であることが判明した。



第4図 試掘 5トレンチ遺構検出図 (S-1/40)

Ⅲ. 調査の記録

次に、調査区から検出された甕棺墓、竪穴住居跡、土壙、円礫集石、建物、柵又は塀列等の遺構と、遺構及び包含層等から出土した遺物について説明を加える。

1. 1号甕棺墓 (第6・9図、図版2-2・10)

B-3トレンチで検出した。後世の攪乱により半分弱を残すのみであった。

掘り方は平面形状略楕円形で、長軸1m、短軸60cm、深さ20cm強を測り、床面は平坦に掘られている。

甕棺は口縁部を東側に向けて埋置され、東側の地山中の自然礫に甕棺の肩部が当たるように埋置されている。胴部の突帯との関係からすると、埋置角度はほぼ水平位に置かれたようである。覆土は下位に黄褐色粘質土、上位に茶褐色粘質土が堆積している。

壺を利用した甕棺で、単棺である。器高は残存高で胴高37cm、肩から頸までが高さ9.4cm、胴部の最大径が底部から32cmのところ50cm、頸部径8cm、底径9.6cmである。底部は丸底風の形状を見せ、底部から外上方へ大きく伸びて体部を形成する。肩部はつぼまり気味に内傾し、頸部へと接続する。直接接合しないため図上にて復元したが若干つぼまり気味であろうか。胴部下半に三角形の突帯を2条貼付し頂部に正目板小口部と一緒に刻目を狭い間隔で施文している。さらに頸部にも低い三角形の突帯を1条貼付している。調整は外面が突帯貼付後1cmに5～6本の正目板で底部から上位にかけてハケ調整を施す。突帯上下はナデ調整を施す。内面は胴部右上がりのハケ調整、肩部はナデ仕上げで指頭の圧痕を残している。頸部はハケの後ナデ仕上げを施す。色調は外面茶～肌色、内面肌色を呈している。胎土は微細な石英や金雲母、安山岩風化粒などを含んでいるが精良である。焼成は極めて良好で、堅緻である。口縁部の形状と穿孔の有無は不明である。外面の肩部から底部にかけて焼成前に赤色の顔料を塗布して焼成している。弥生後期前葉の所産である。

2. 2号甕棺墓 (第7・9図、図版3-1・10)

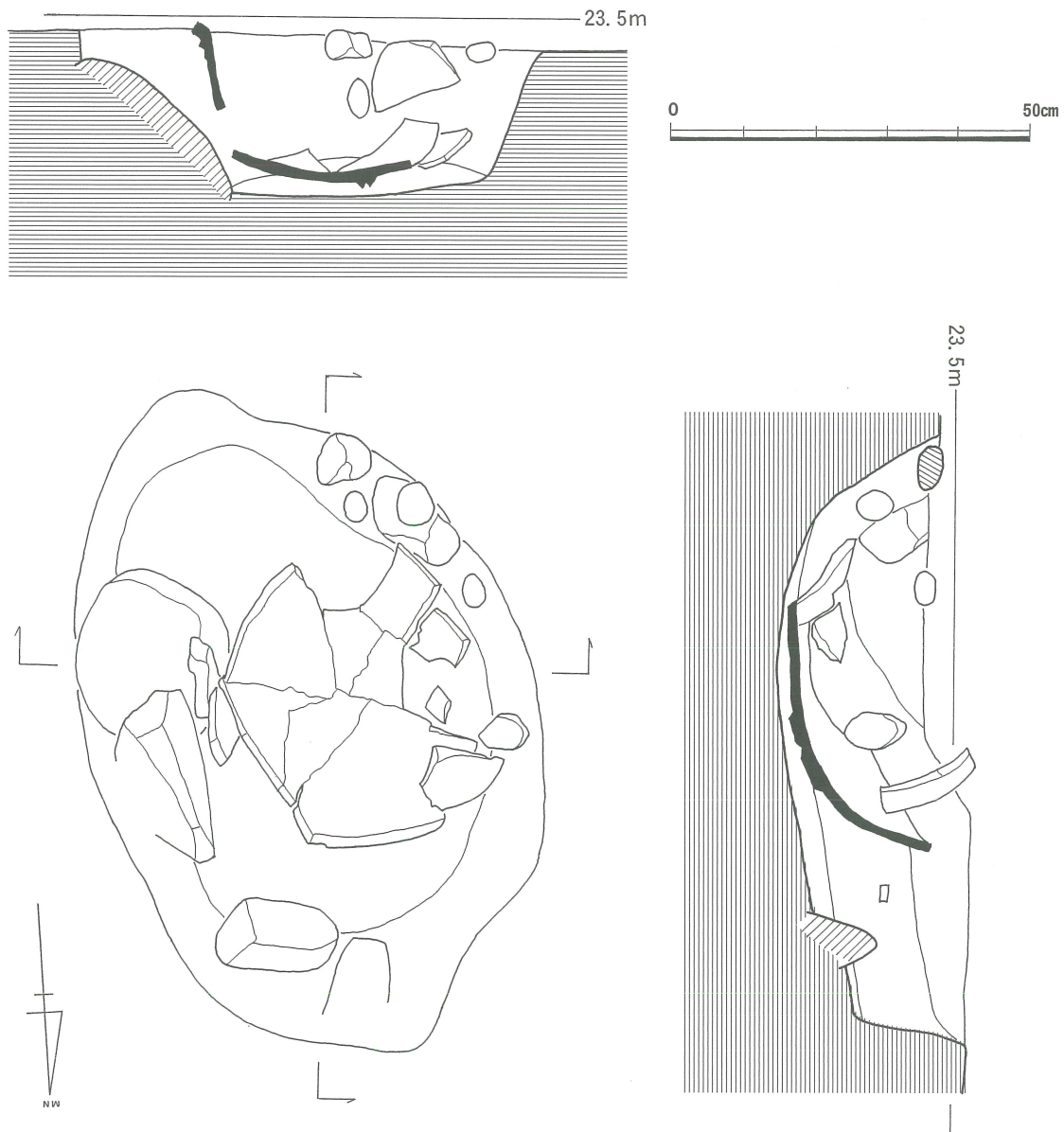
C-4トレンチで検出した。掘り方は不整形の楕円形状と見られるがかなりの程度歪である。長軸1.55m、短軸80cm、深さ50cmの土壙の奥部に埋置され、傾斜角は48度を測る。覆土は茶～褐色粘質土で炭化物を含んでいる。

甕棺は口縁部を南に向けて埋置され、単棺で中型の甕が使用されている。器高53.2cm、口径26.2cm、底径10cm、胴部最大径40～42cmを測り、土圧により若干歪んでいる。底部はわずかに上げ底で、体部は大きく外反しながら胴部に移行し、体部の中ほどで最大径を測る。外面には断面三角形の貼付け突帯を1条貼付するが、現在は剥落し、幅3cm程の剥落痕を残している。剥落痕の直上には沈線を巡らして突帯の貼付け位置を指示している。突帯上部は内湾しながら肩部に移行し、緩やかに外反して口縁部を作る。頸部には三角形の突帯を1条貼付している。

器厚は1cm程で均一である。

調整は体部外面は緩やかな弧状を呈すハケ調整を施し、1cmに4本、10本の2種類の正目板を使用している。肩部から口縁部外面まではハケの後ナデで仕上げ、口唇部から体部内面はナデ仕上げである。ハケ調整は突帯貼付後行われており、突帯剥落部にはハケ整痕は見えない。

内面口唇下10cmほどから外面全面に赤色顔料を塗布している。穿孔は不明である。胎土には2mm大の細粒を含むが精良である。焼成は良好でよく焼き締まっている。色調は内外面共に黄茶色を呈している。弥生後期前葉の所産である。



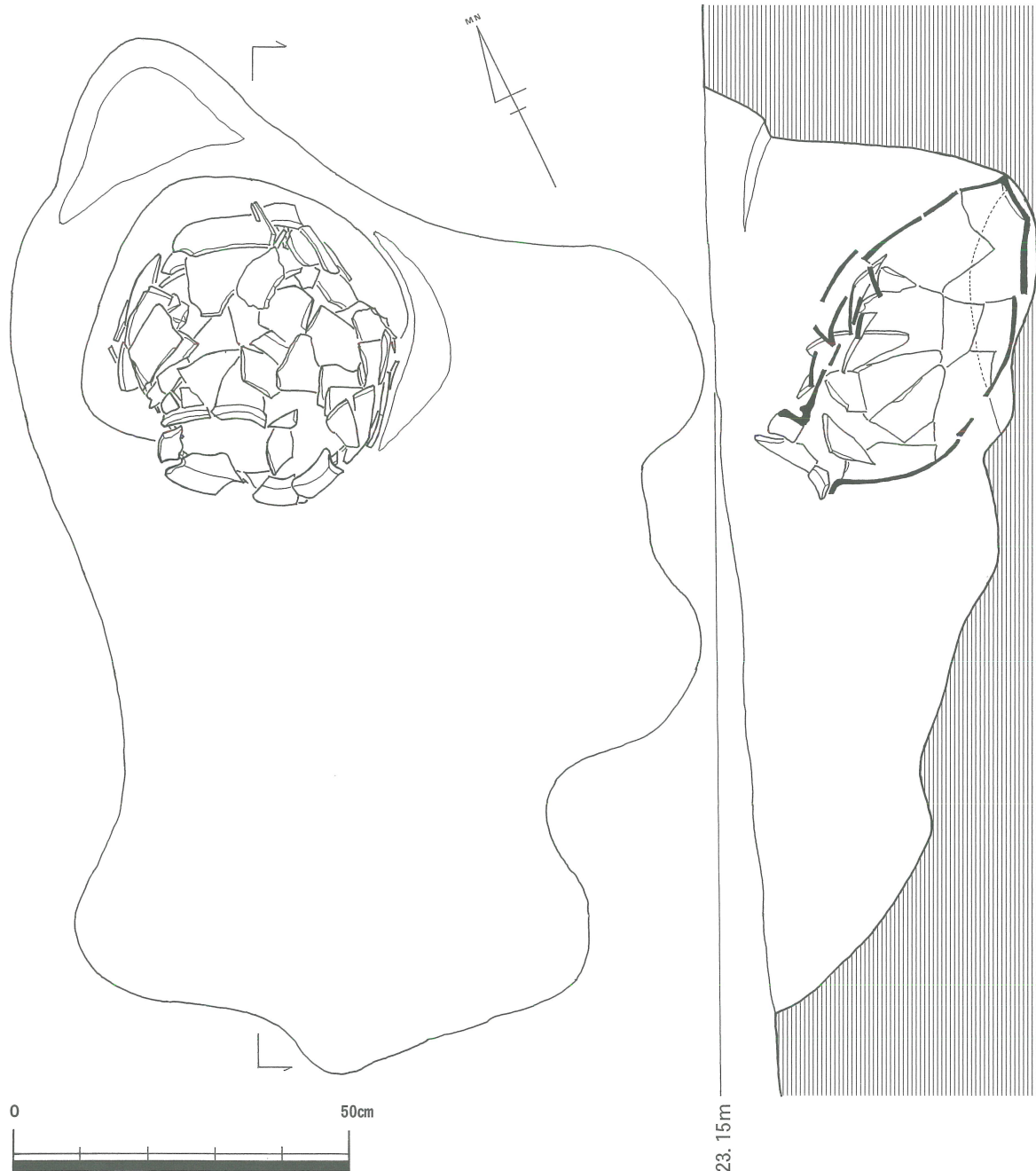
第6図 1号甕棺墓実測図 (S-1/10)

3. 3号甕棺墓 (第8・9図、図版3-2・4-1・10)

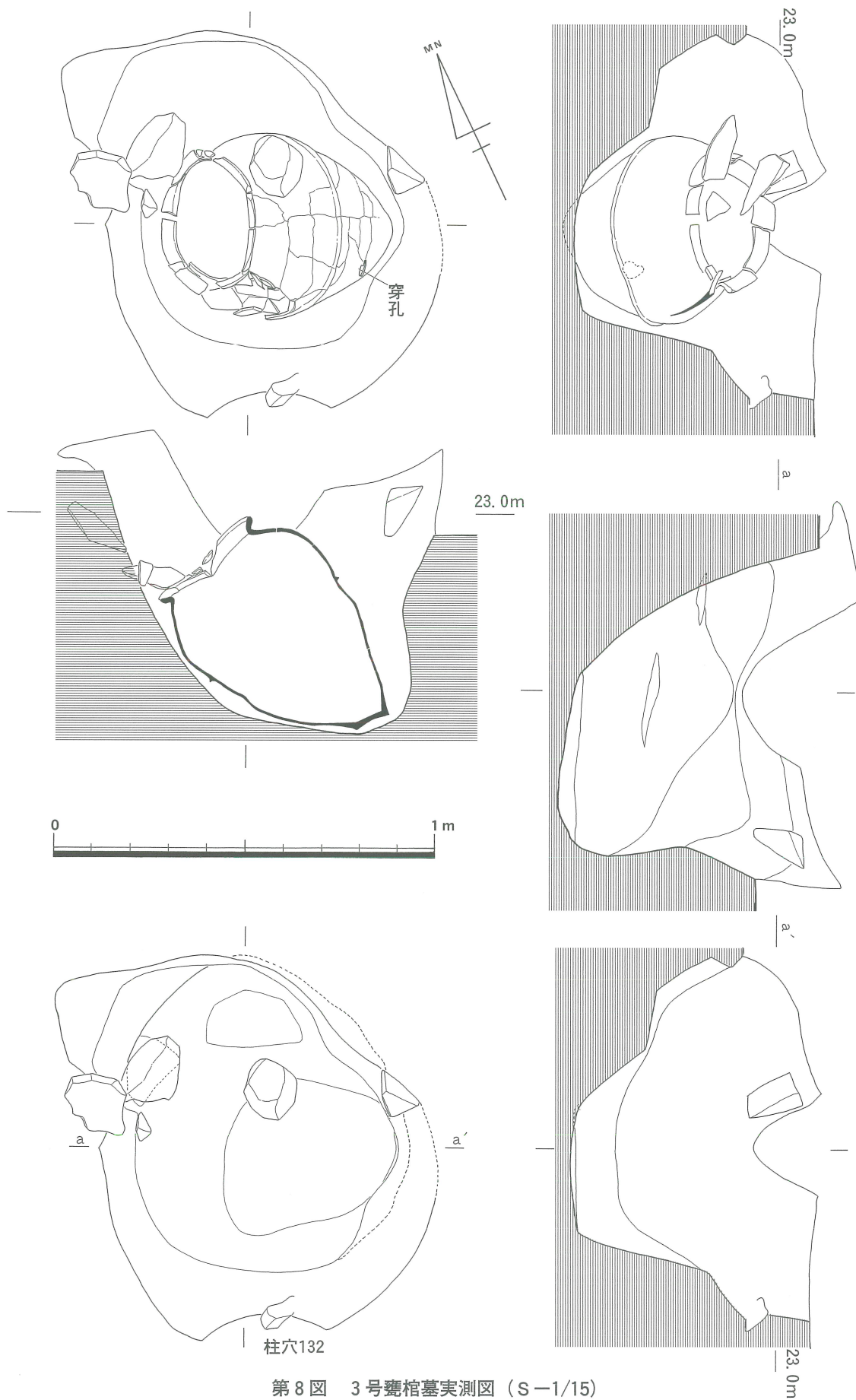
C-3 トレンチ、2号住居跡内の柱穴151の底面精査時に検出された。

掘り方は甕棺長軸方1.8m、短軸2m、深さ1.3mの略円形で、床面はほぼ平坦、北側壁面に2箇所の平坦面を掘り残してステップとしている。傾斜角は43度を測り、西向きに埋置している。口縁部西側には安山岩自然石が3個見られ、棺蓋の押さえにしたものと思われる。

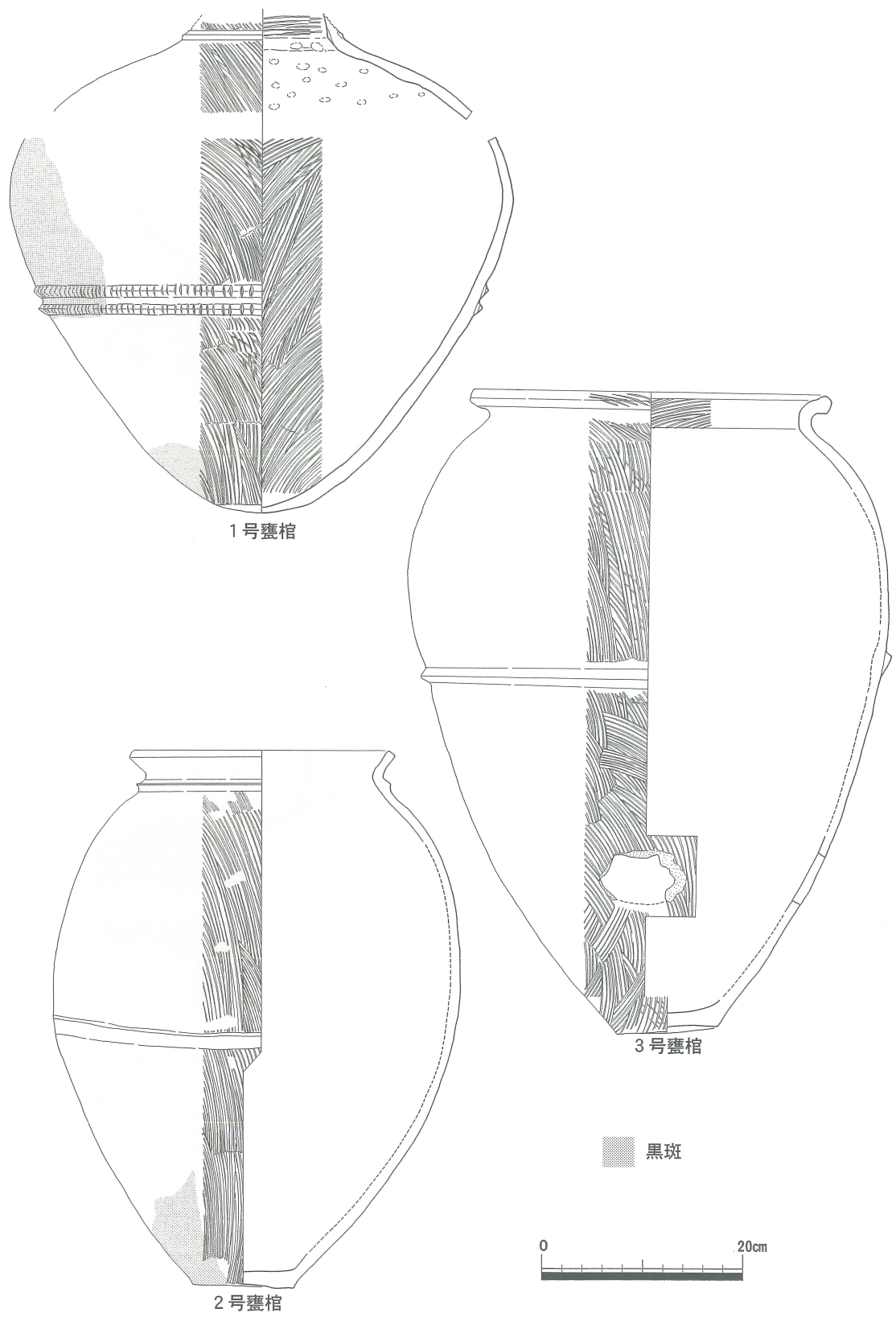
甕棺は単棺で中型の倒卵形を呈する甕が使用されている。器高63.7cm、口径36cm、底径9.5~10cm、胴部最大径47.6cmを測る。底部はわずかに上げ底で、体部は内傾しながら伸び上がり胴



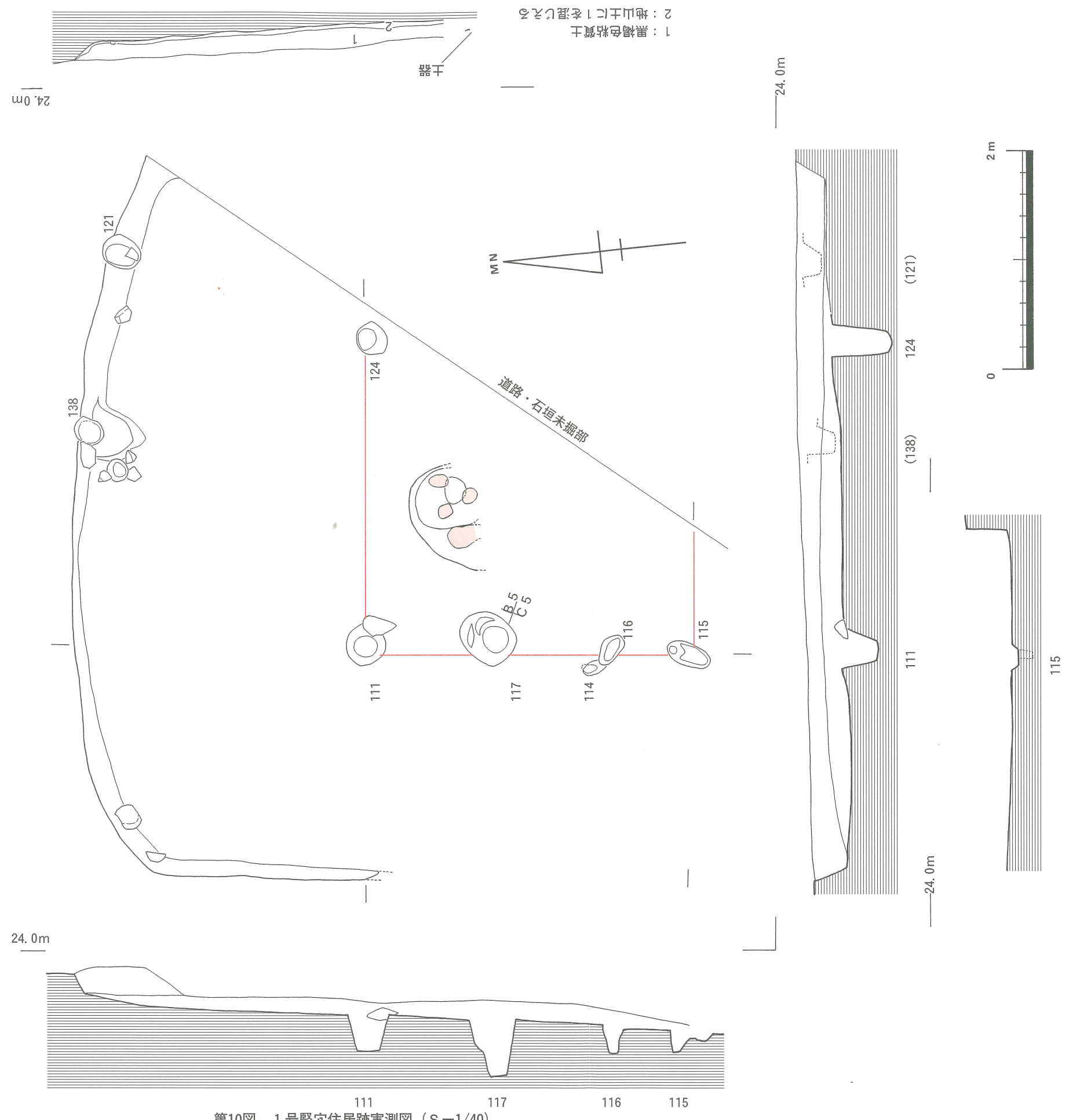
第7図 2号甕棺墓実測図 (S-1/10)



第8图 3号甕棺墓实测图 (S-1/15)



第9图 1~3号甕棺实测图 (S-1/6)



第10図 1号竖穴住居跡実測図 (S-1/40)

部を形成し肩部にいたる。口縁部は短く外反し、口唇部は丸く納める。口縁上面はわずかにくぼむ特徴を有する。器体の中ほど上位で最大径を測る。器体の外面に断面三角形の貼付け突帯を1条貼付する。器厚は1cm程で均一である。調整は体部外面に突帯貼付後、緩やかな弧状を呈すハケ調整を底部から肩部まで施し、1cmに4～5本の荒い正目板を使用している。口縁部外面から内面まではハケの後ナデ仕上げ、内面頸部以下はナデ仕上げである。胴下位には内面から外面にかけて焼成後穿孔した径5cm程の略円孔が認められる。この円孔は棺埋置時には上向きであった。色調は外面赤褐色～黒褐色、内面赤褐色を呈し、胎土は1～2mm大の細粒を含むものの精良である。焼成は良好で硬く焼き締まっている。弥生後期初頭の所産である。

4. 1号竪穴住居跡（第10・11図、図版4-2・5-1）

B-4・5トレンチで検出され、一部東側の道路下に延びている。長軸6.6m+、短軸3m+、周壁20cm程を測る隅丸方形の住居跡と想定される。南方に地形が傾斜していることと、後世の耕作等により南側は消滅している。壁際に溝は認められない。周壁の立ち上がりは20cm程度であり、かなりの削平を受けていると思われる。

炉跡が住居跡の中心に位置すると仮定すると、直径7.2m程の住居跡となり、面積は約52m²、坪換算で15坪、畳換算で30畳となる。かなり大型の住居跡である。北壁中央に2号住居跡と同様の張り出した掘り残し部分が認められる。

覆土は粘性の強い黒褐色土で炭化物や焼土粒を含み、20cm程の層厚である。遺物はこの層に包含されている。

主柱穴は柱穴124-111-117-115-（調査区外）、棟持ち柱として柱穴117-（調査区外）を想定している。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。それぞれの芯々距離は2.8m、1.2m、1.8mを測る。柱穴117と対になる柱穴は調査区外と想定している。

北側の立ち上がり部に柱穴121、138が認められるが、住居跡に伴うものではなく、後世の所産と想定される。しかしセットになる柱穴群は現時点では確認できない。

炉跡はその中心が柱穴117の東1mに位置している。炉跡は長軸1m、短軸現存長65cmで楕円形状を示し、その範囲が赤変している。範囲内には4箇所の硬化部分があり、20cm大の西側の1個と、10cm大の3個がセットとなるようである。東側3個に囲まれた部分には土混じりの灰の集中部があり、炭化物はほとんど含んでいない。この3個の硬化部分は芯々で25～30cm程を測り、五徳的機能を果たしたものと思われる。炉跡は深さ15cm程の舟底状をなし、東側灰混じり周辺は径55cmほどが窪まっている。

出土遺物

土器（第12図、図版11-1）

土器・石器などの出土遺物は覆土からの出土として一括して取り上げた。

土器は出土数は多いものの、多くは小片化しており、復元は困難であった。

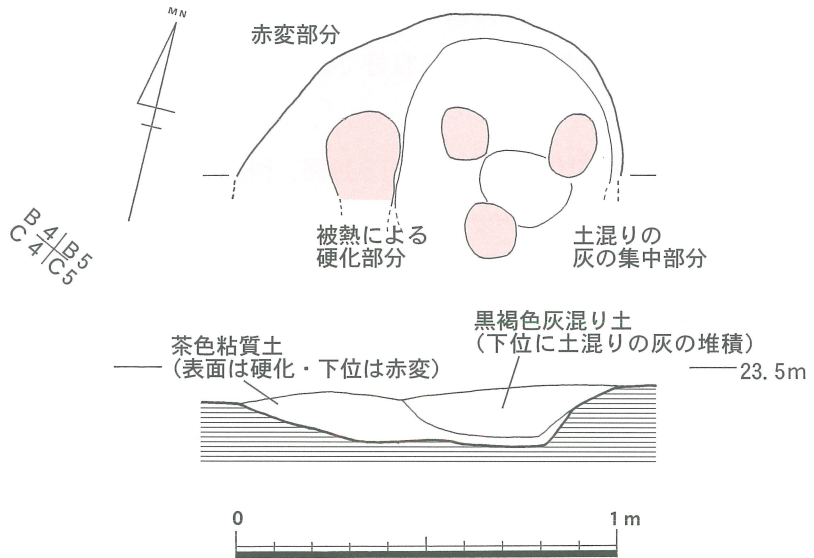
また、石器の出土量もわずかであり、あたかも1号住居跡廃絶後住居内を整理したような感

さえ受ける状態であった。

なお、出土土器の口径などの諸属性については末尾の第3・4表に掲載している。

在地系甕、布留式系甕、二重口縁壺、小型の鉢、手捏ね罎、高坏、台付きの甕が一括資料である。

1～3は甕口縁部の資料で、1・2は布留式系の土器である。1は内湾しながら立ち上がる口縁部の内傾する口唇を内外につまみ出している。口縁端面は内傾するクセを有している。内外面共にナデ調整。2は口唇部を上方へつまみ上げ、内面に稜を有する。口縁端面は外傾している。調整手法は器壁が荒れており不明である。3は長胴系の資料で口縁部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は平坦に仕上げている。外面ハケのちナデ調整。内面はナデで仕上げる。



第11図 1号竪穴住居跡炉跡実測図 (S-1/20)

4はわずかに外反しながら立ち上がる口縁部で3同様口

唇部は平坦に納めている。口唇から内面はナデ仕上げ、外面は荒いハケの後ナデで仕上げる。直口縁の壺か複合口縁の壺と思われる。

5・6は二重口縁壺で頸部から大きく内傾・外反して短く立ち上がる口縁部が付くものである。5は立ち上がり部が厚く、口唇部を内外につまみ出し、6は立ち上がり部を薄く、口唇部を丸く作り出す。ともに精製された胎土で、色調は浅黄色を主し、他の土器と趣きを異にする一群である。胎土には金雲母を含む例も見られ、他所から搬入されたものと思われる。

7は鉢で短く外湾・外反する口縁部が付く。外面から口縁内面はハケ調整、内面胴部はヘラ若しくはハケによるケズリと思われる。

8は手捏ねの無頸の罎で内外に指頭圧痕を残している。

9は器台の脚端部で上下につまみ出して三角形状の端部をなす。在地系である。

10～15は高坏で、10は内面は棒状工具で調整しその痕跡がタテの線状に残っている。外方から3孔を穿つ。11は坏部との接合を示す資料で脚部上面が半球状に凹んでいる。脚柱部中位に外方から穿孔しており、この部分から脚端部に向けて裾広がりとなるものである。13のような外底面にホゾを有する坏部が接合されるものである。12は高い脚柱部をもつ高坏で在地系である。脚柱内面にシボリ痕は看取されない。14・15は内湾しながら脚端部に至る資料で、14は円孔を穿ち、端部はやや丸く納める。内面細かいハケかナデ仕上げ、外面ハケ後ナデ仕上げ。15は円孔は穿たない。

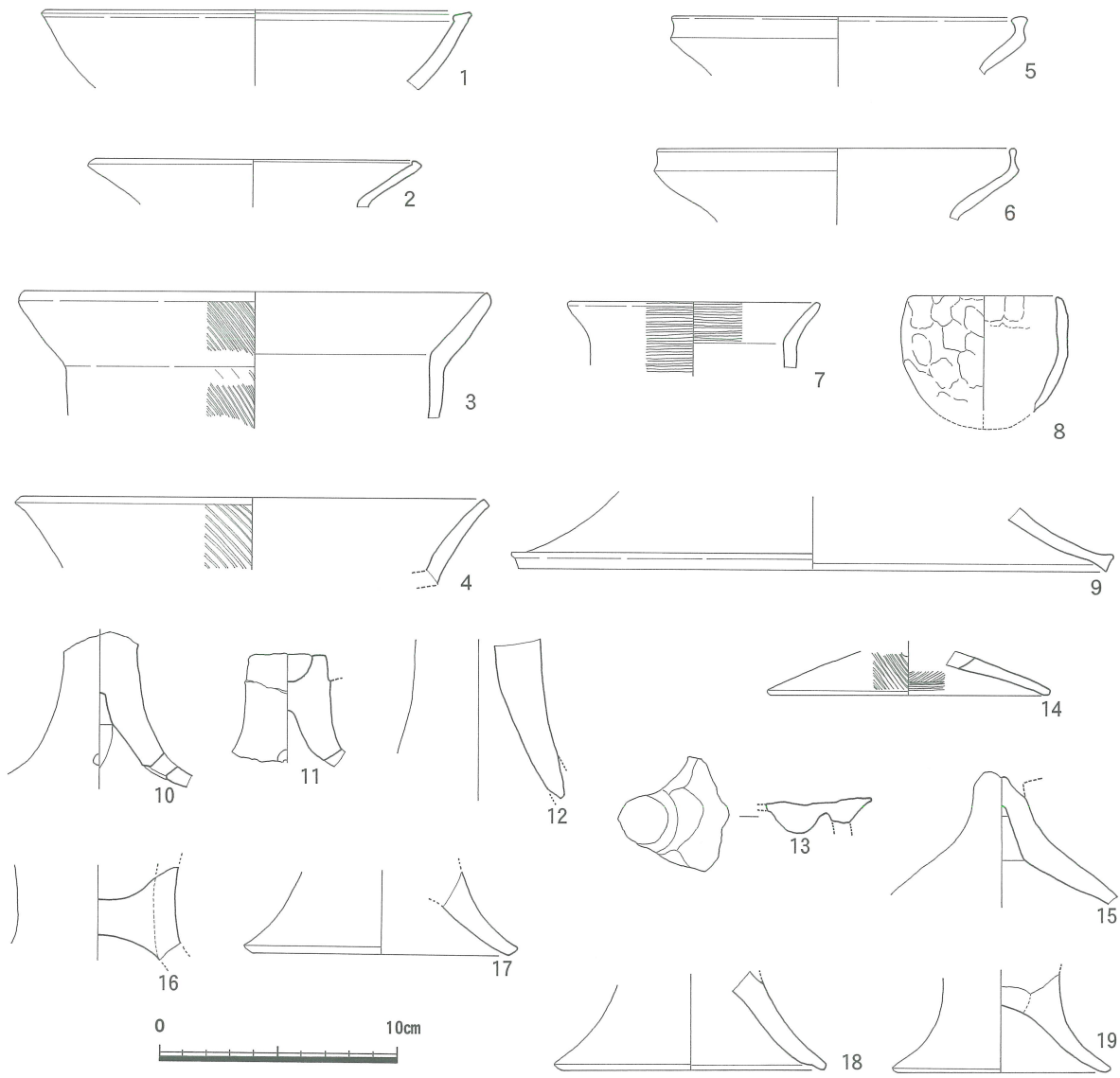
16～19は鉢あるいは甕の脚台である。

16は体部から脚部の資料で、接合部の最もつぼまる部分を上下から充填して製作している。17はスカート状に大きく裾拡がりし、端面は平坦に納める。復元すると116mm程の脚径となる。18も同様の形状を見せるものの、脚端面はやや丸く納め、内面にわずかに段を有している。19も同様の形状を見せ、端部はやや尖り気味に納めている。体部との接合・充填部で剥離しており、脚台部からの充填土のみを残しており、体部底面からの充填土は剥落している。接合方法の好例である。

石器 (第13図、図版11-2)

1号竪穴住居跡から出土した石器でドット・マップで取上げたものは、石包丁片と思われる磨製石器1点を含め計12点である。12点の中には蛇紋岩・粘板岩の原石各1点を含んでいる。これらの中から3点を図示した。

1は叩き石で全長10cm、径35mmの安山岩自然礫を素材に用いている。全体が水磨されて平滑

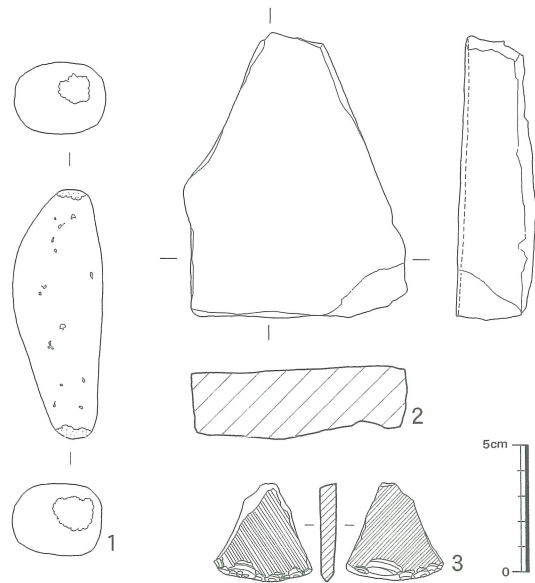


第12図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (S-1/3)

である。長軸の両端には使用による敲打痕が認められ、敲打面はやや平坦であり、対象物を叩いて潰すのに使用されたものであろう。重量は150gである。

2は砂岩を用いた砥石で、全長115mm、幅87mm、厚さ3cmを測る。砥石面は周辺よりわずかに窪むものの、平坦・平滑で線状痕等は認められない。このことから研磨の対象物は幅広の面を有するものと思われる。

3は安山岩を素材にした磨製石器で石包丁の破片であろうか。残存長38mm、幅40mm、厚さ6mmを測る。表裏の平坦面は平滑で、刃部に対し斜位の研磨を行う。刃部は外湾し、施刃は両面から行い両刃である。刃潰れしたために刃部を薄く敲打・調整し、再研磨する前段階のものであろう。



第13図 1号竪穴住居跡出土石器実測図 (S-1/3)

以上が1号竪穴住居跡からの出土遺物であり、布留式期の所産である。

5. 2号竪穴住居跡 (第14・15図、図版4-2・5-2・6)

B-2・3トレンチからC-2・3トレンチにかけて検出された。強粘性の茶色粘土層に掘り込まれた長軸6m、短軸4m、残存壁高30cmを測る隅丸長方形の住居跡である。四周に溝を備えず、排水に苦慮したと思われるが確認できなかった。ただ北壁から西壁にかけて浅い溝状の遺構を確認しており、この遺構が溝として一部機能したことは窺うことができる。

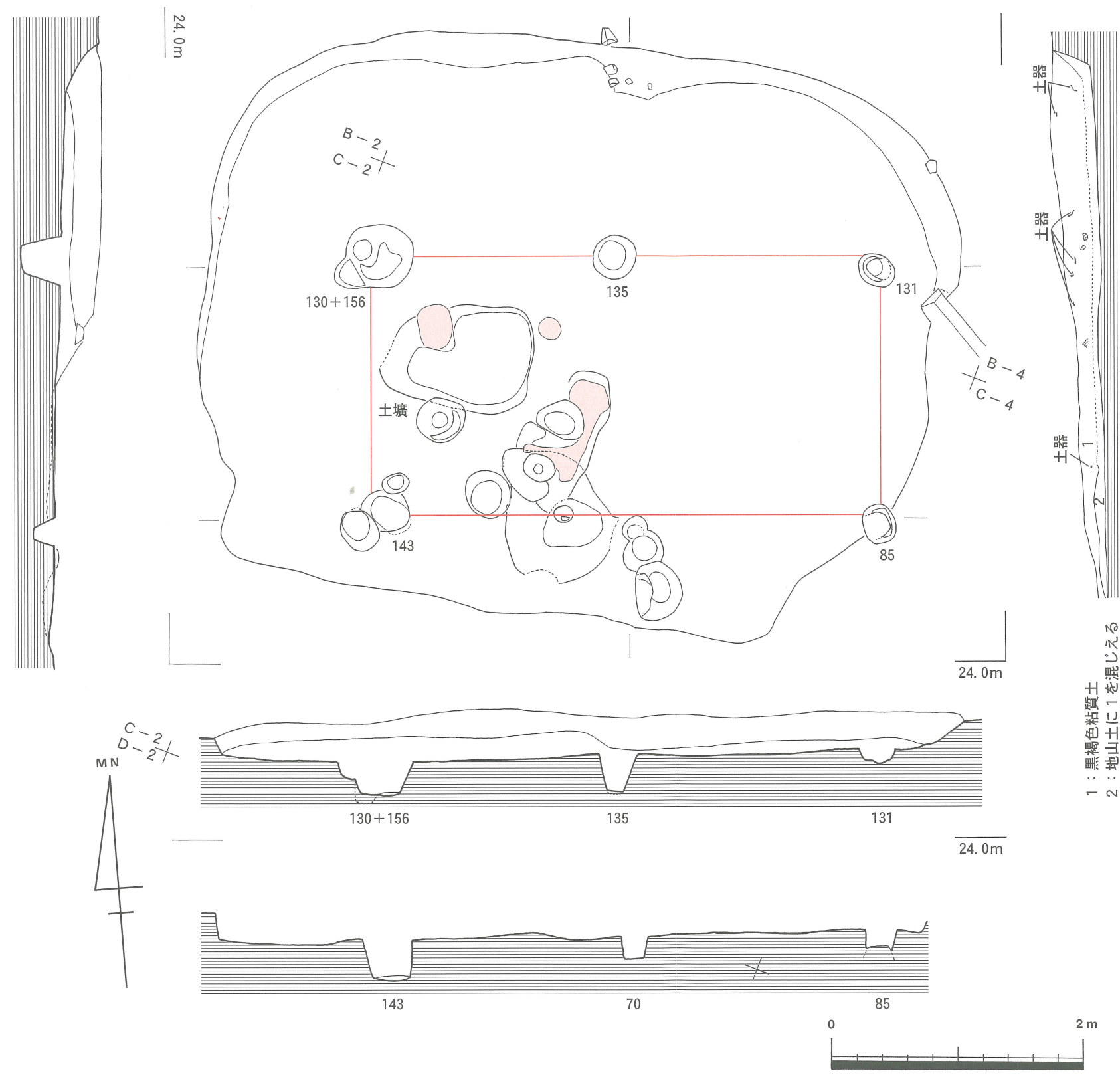
柱穴は住居跡内にいくつも点在しているが、主柱穴は柱穴85-131-156-143-(85)と見られ、それぞれ芯々距離は2m、4m、2m、4mを測る。深さは検出面からそれぞれ18cm、15cm、30cm、30cmを測る。覆土はいずれも茶～黒褐色粘質土を充填しており、炭化物や焼土を含んでいる。

北壁ほぼ中央部に地山の突出部がありカマドの痕跡ではないかと精査したが、周辺部での被熱箇所や煙道などが確認されず、その可能性は低い。

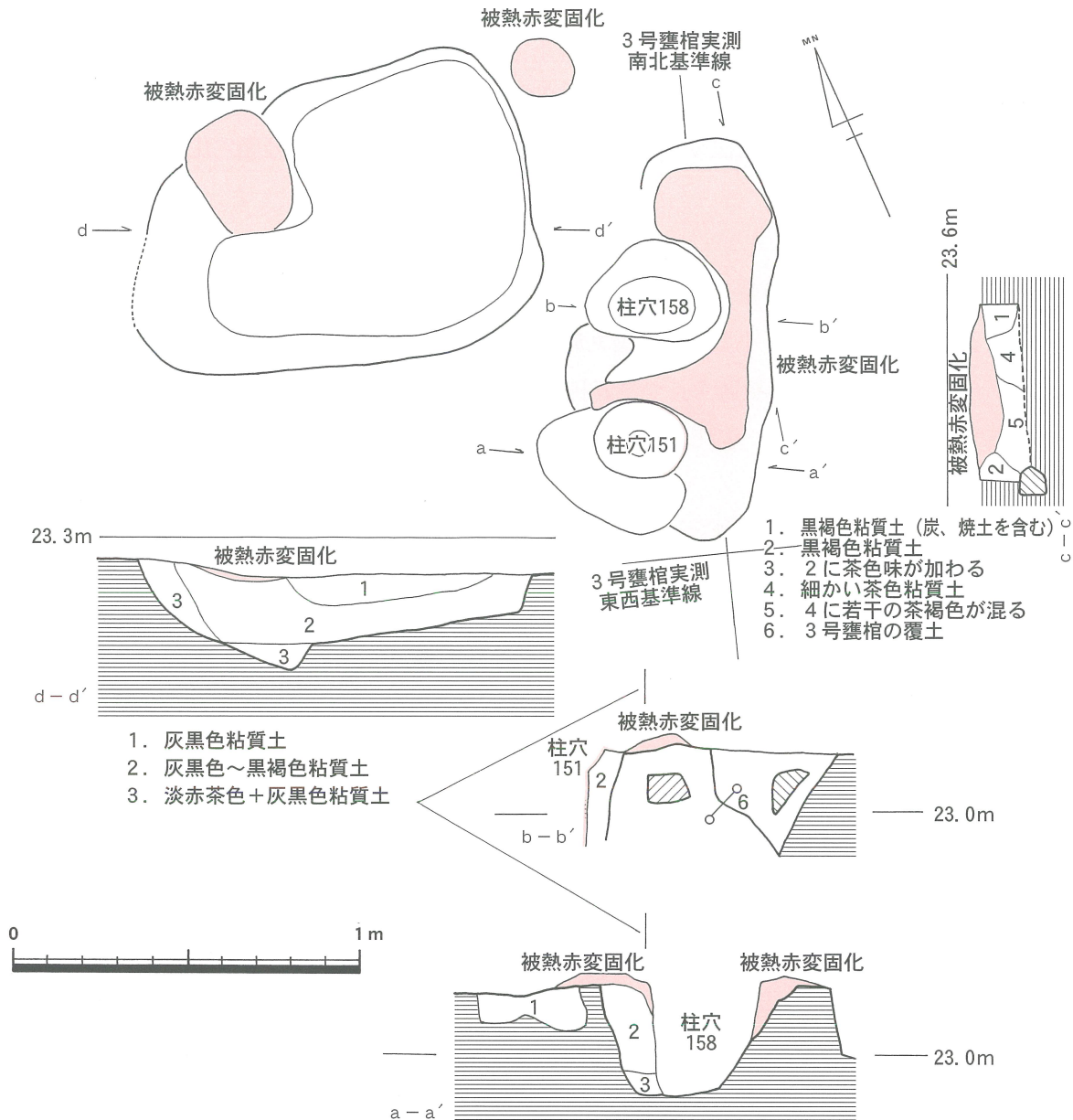
住居跡のほぼ中央部に長軸1.2m、短軸0.7mの被熱箇所が確認され、カマド様遺構の可能性が窺えた。この範囲内に柱穴151、158が存在し、周縁部を囲むように被熱赤変固化していた。

柱穴151は内壁の東から北にかけて周縁から25cm程の深さまで赤変固化しており、それ以外の周壁は変化が見られなかった。この柱穴には底部付近に青磁碗を含んでおり、明らかに後世の造作であり、本来の柱穴を攪乱・掘削したため東から北にかけての被熱赤変固化部分がかろうじて残ったのであろう。

柱穴151は、本来は径40cm、深さ45cmほどのもので、内側に25cm程の壁をなす構造物を備え



第14図 2号竖穴住居跡実測図 (S-1/40)



第15図 2号竪穴住居跡炉跡及び土壌実測図 (S-1/20)

ていたものと推定され、西側に段を有している。この柱穴の北側20cmに位置する柱穴158も周縁部は赤変固化し、さらに内壁には上面に接続して東側で10cm、西側で30cm程の深さまで被熱赤変固化していたことは、151とほぼ同様である。B-B'断面では東側内壁から10cm程の幅で黒褐色粘質土が存在している。この土層の上面は被熱しており、柱穴掘削後充填されたものと思われる。

これら2個の柱穴と被熱赤変固化部分はお互いに関連性を有するものと推量され、地下式のカマド的な機能を有するものであったろうと思われる。それは柱穴周縁部及び内壁の被熱による赤色変化と固化であり、下方からの火炎による熱変化によっているからである。ただ、その構造についていまひとつ明確にしえなかったのは残念であった。

この被熱部分に西接して灰混じり土壌が存在する。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.2mほどの

楕円形状のもので東壁は垂直に近く立ち上がるのに対して、西壁は緩やかに立ち上がる。なお東側と西側に2箇所断面舟底状の被熱・焼土部分が接している。土壌からは132点の土器片と8点の石器が出土している。覆土は3層に分層され、下位に行くに従い炭化物がやや多く出る傾向がある。この土壌も前記カマド様遺構との関連が想定され、2号竪穴住居の付属施設である。

出土遺物

2号竪穴住居跡からは多量・多種の遺物が出土した。土器は在地系甕、布留系甕、複合口縁壺、二重口縁壺、直口壺、小型壺、小型丸底埴、小型の鉢、鉢、高坏、器台、在地系器台、台付甕、台付鉢、外面に叩き痕跡を持つ甕資料、内面全面にヘラケズリ調整を施した資料などが、叩き石などの石器とともに一括して出土した。他に切り合い関係で出土した須恵器、青磁もこの項で取り上げる。

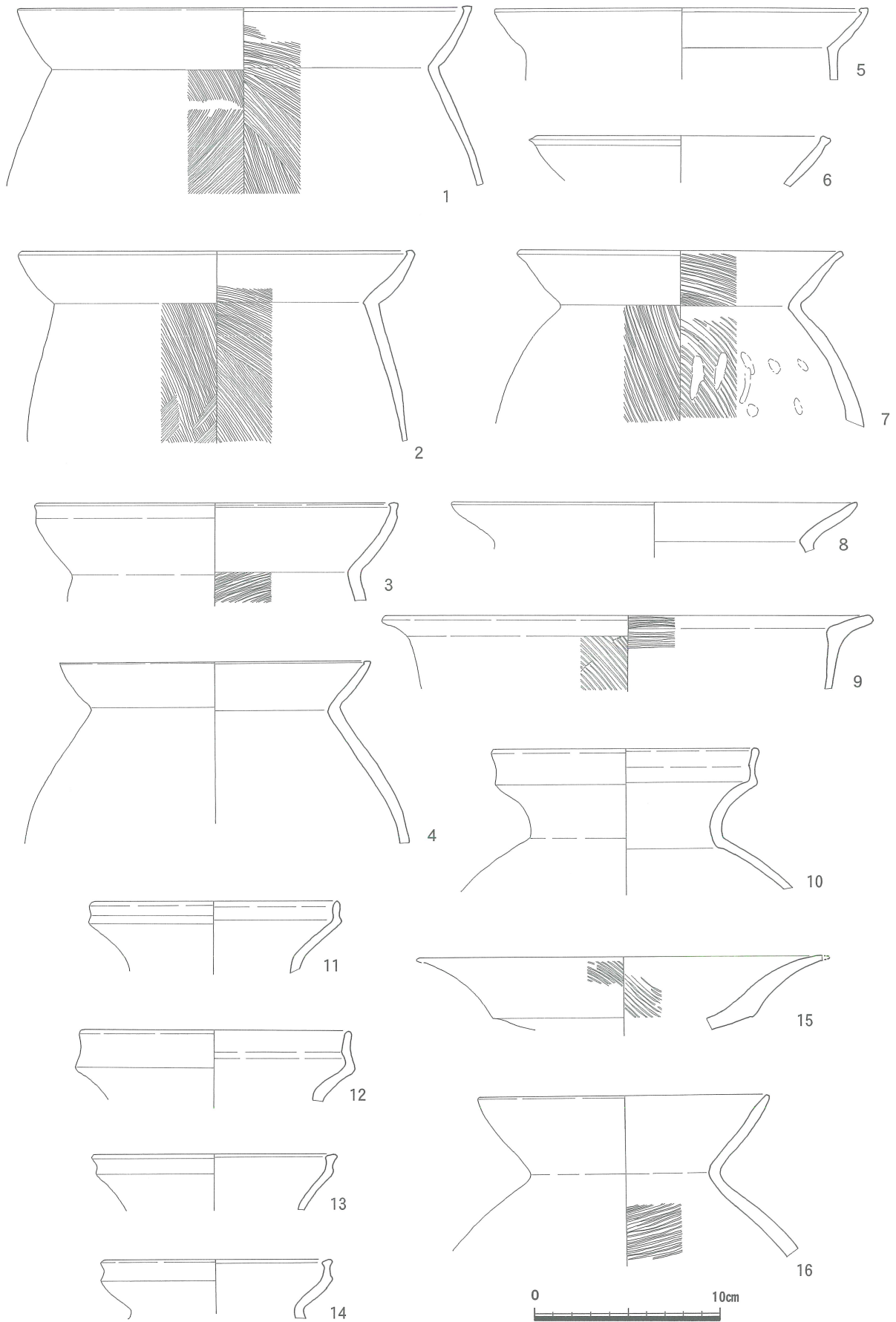
出土土器の口径などの諸属性については、末尾の第3・4表に掲載している。

土器（第16～18図1～49、図版12～15）

1～9は甕形土器で1～6は布留式系である。体部は球形を呈すると思われる。いずれも明確に折れ曲がる頸部から、内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。1は頸部内外面に明瞭な稜を有している。口縁部は内湾気味に立ち上り、端面は平坦に納め端部は内側につまみ出している。調整は内外面ともに1mm間隔の線状痕跡を残す正目板小口部で調整されており器壁も薄い。2も1とほぼ同様の形状を見せるが、口縁部の作行きにおいてわずかの違いが認められる他は、調整手法等似通っている。3は二重口縁壺の作りに近く、外面口唇下を強くナデで凹ませる特長を持つ。4は「く」の字状に外反する口縁を有し、端部は平坦に納め、口唇は内側にわずかに突出する。5は長胴になろうかと思われるもので、口縁は内湾気味に立ち上がる。端部は平坦で内側にわずかに突出させる特徴を有する。6は口唇外方へもつまみ出している。これ以外はいずれも口唇部は平坦に納め内面につまみ出す特徴を有している。調整は胴部内外面ハケ調整、口縁部はハケ後ナデ仕上げである。7は在地系との折衷形と見られる例で、口縁外面を肥厚させながら外反させている。端面は平坦に仕上げる。調整は胴部内外面ハケ調整で、内面に指頭の圧痕を残す。口縁外面ナデ、内面ハケ後ナデ仕上げ。8は内湾気味に外反する口縁部を有するが、端面を薄く納める点、他の資料と異なる。また色調等の土器相が他と異なり、異質の感じを受ける。外に同一の資料が存在するが接合せず、調整等を含めて全体を明らかになし得ない。9は在地系の甕で黒髪式の系統を引くものであろう。口縁部は逆L字状に外反し、端部は丸く納める。後期前半のものである。

10～14は二重口縁壺で、つぼまる体部に大きく開く頸部が繋がっている。この頸部の擬口縁上にさらに反転して伸び上がる口縁部を造作している。口唇部の納め方には、丸く納めるもの（10～12）、端部を平坦にして内外につまみ出すもの（13・14）の2者がある。11の口縁外面には凹線文の退化したものであろうか、細い沈線を2条巡らしている。

15は質量感のある資料である。シャープではないが外面に段を有し大きく外反することから、



第16图 2号竖穴住居跡出土土器実测图 (1~16) (S-1/3)

複合口縁壺と想定される。

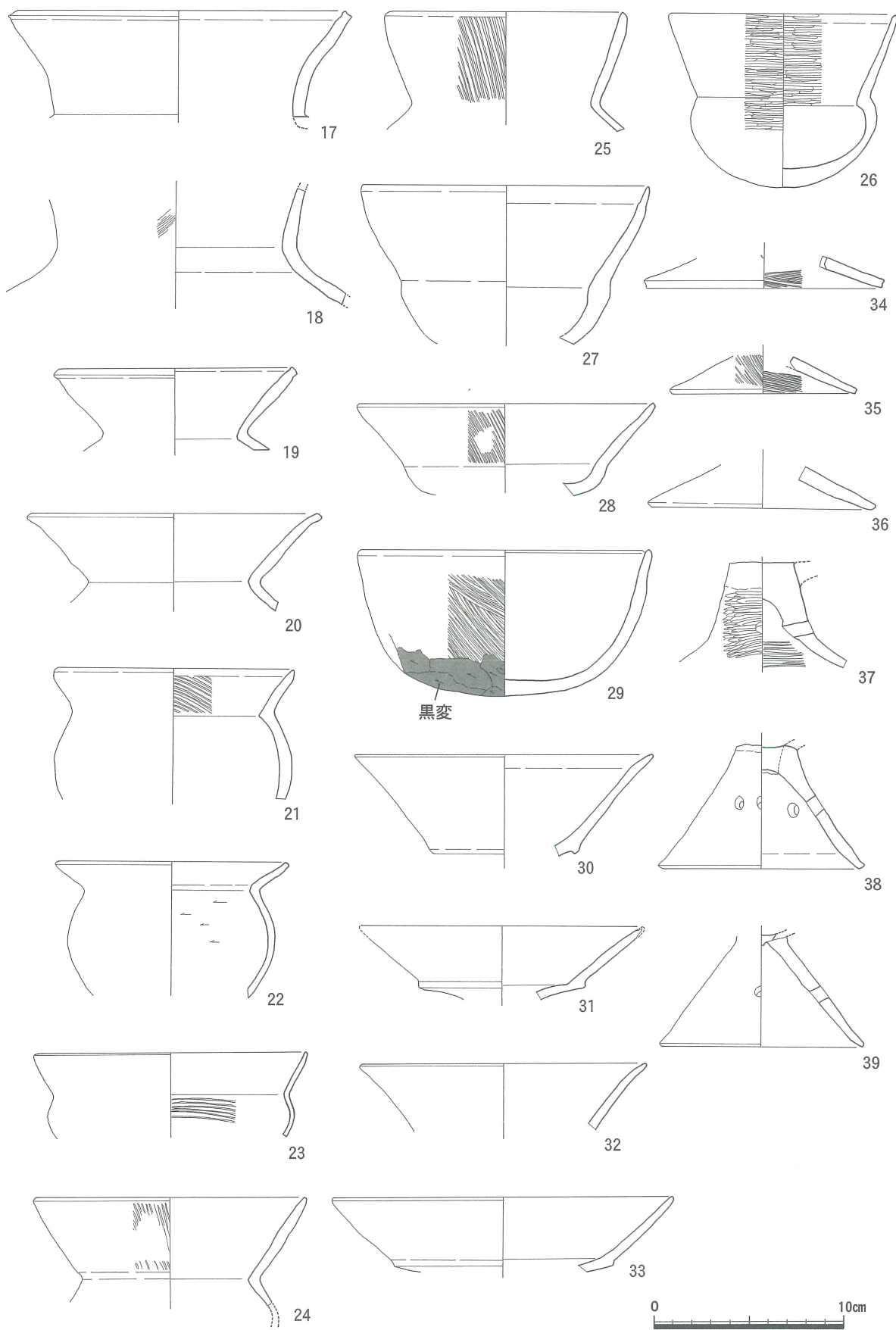
16～18は直口縁の壺で、16は内湾しながら大きく外上方へ開く口縁部を有している。口唇部は尖り気味に納める。胴部内面はハケ調整を施すが、他は器表が荒れていて不明である。精製された胎土を使用しており、持ち手が非常に軽い。17は頸部から外上方に大きく外反し、口唇部は中凹みに仕上げている。内外面の調整痕は明瞭ではないが、ナデを基調としているようだ。胎土は精良で焼成も良好である。色調は黄灰色を呈し、また金属性の高い音を出すことなどから、須恵器的あるいは陶質的であるが、堅緻ではない点異なる。肩部以下の資料を欠損するが半島系土器と見られる。18は土器質的には17と相似通うが、持ち手が軽い資料で精製された粘土が使用されている。形状は破片のため判然としないが、17に似た器形を呈するものであろう。ただ胎土中に黒曜石の原石粒を含んでおり、国内で焼成されたものと思われる。色調は浅い黄橙色を呈す。調整は器表が荒れているため不明である。

19・20は壺あるいは鼓形器台と想定される資料である。19は肩部ですどく反転する口縁部を有し、端部に向かって器厚を増しながら口唇部下で内外面から凹むようにナデて仕上げている。20は大きく伸び上がる形態を示し、端部はやや尖り気味に丸く納めている。調整は内外面ともナデて仕上げている。

21～23は埴で、21は鋭く屈曲した頸部から外湾・外反する口縁部が付き、口唇部はやや尖り気味に納めている。内面にわずかに段を有している。外面は器表が荒れているため調整不明、内面は口縁部がハケ後ナデか、胴部はヘラによるケズリと思われる。22・23は内湾・外反する口縁部を有し、口唇部は平坦に納める。22は丸い体部に「く」字状に外反する口縁部が付くもので、口径が胴径を上回っている。胴部外面から口縁部内面はナデ仕上げ、内面は横方向のヘラケズリを施す。23も22と同形状を主しているが、ひと回り大きい。調整手法は胴部内面ハケ後ナデか、他は器表が荒れているため不明。精製土器である。

24～26は小型の壺で、24は頸部で鋭く屈曲して大きく伸び上がる口縁部を有する。口縁部は中程の器壁がやや厚く、前後にうすい。調整は口縁部外面ハケ後ナデ、内面ナデ仕上げである。小片からの復元・作図であり、25くらいに立ち上がる可能性もある。25は内湾気味に高く立ち上がる口縁部を有し、大きく張る体部に移行するものと思われる。調整は外面縦方向のハケ後ナデ、内面横方向のハケ後ナデで仕上げる。26は扁球形の体部に頸部から鋭く屈曲して大きく開く口縁部が付くもので、小型丸底埴とされるものである。口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部内面がわずかに凹む特徴を有する。調整は口縁部内面から外面体部上半までは横方向のヘラミガキである。体部外面は器表が荒れており不明であるが、内面はナデて仕上げている。

27・28は鉢で、器形的には26に似るが頸部の締りがなく体部から口縁部への移行に明確な差異が見られないため、埴とは別の機能をもつものと想定して別器種とした。また個体数は多くないものの複数個体存在しているため、別器種としたものである。27は浅い体部を有し、くびれることなく緩やかに口縁部へ移行する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部内外面を強くナデで尖り気味に納める。全体に厚く作られている点が、埴との相違点として指摘できる。



第17图 2号竖穴住居跡出土土器実測图 (17~39) (S-1/3)

28も浅い坏部に大きく開く口縁部を有する。

29は鉢である。やや厚手の半球形を呈し口縁端部は内外面からナデつけて尖り気味に納める点は27と同手法である。外面ハケ調整し、のち体部下から底部は手持ちのヘラケズリを施す。口縁部外面から内面はナデ仕上げ。

30～37は高坏で、30～33は坏部資料である。底部と坏部の接合は32を除いていずれも段を有している。33は坏底部から口縁部に移行する部分の資料で、口縁部は大きく開きまた坏部は深い。口縁部下の内面でわずかに外反させる稜が看取され、これからすると鼓形の器台の可能性も残されている。口縁部の形状は外上方に伸び上がるもの(31)、外反するもの(30、32)、内湾気味に伸び上がるもの(33)の3種型に分類できる。調整手法はいずれも内外面ナデて仕上げている。34～37は脚資料で、端部を中凹み(34)、平坦(35)、丸(36)に納めている。調整は34は外面ナデ、内面ハケ調整を施し、円孔を穿つ。35は外面ハケ後ナデ、内面ハケ調整後、円孔を穿つ。36は内外面ナデ仕上げ。37は脚柱部から裾部資料で端部を欠損する。調整は内面頂部ナデ、以下はハケ後ナデ、外面はヘラミガキを施す。3孔を穿つ。

38・39は器台脚部資料で、上部の受部の形状は明らかにし得ないが、浅い皿状の受部が付くものと思われる。脚端部は内外面から押さえて成形し、尖り気味に納めている。受部との接合部は中空部を粘土で充填している。38は2孔1対の円孔を3箇所、39は3孔穿つ。

40・41は器台脚端部資料で、40は在地系の器台資料で端部を大きく中凹みにするため上下に尖らせている。外面わずかにハケの痕跡を残す。41は脚端部がわずかに猫足状になる。端部は平坦に納める。調整は外面ナデ、内面ハケ後ナデ仕上げ。高坏の脚部の可能性も残している。

42～46は甕や鉢の脚台で、42は脚端部に向けて大きく開く資料で甕と思われる。脚端部を欠損しているが15cm以上に復元できよう。また上部との接合面は径6.5cmを測り大きい。調整手法は器表が荒れていて不明。43は鉢の脚台と思われる資料で、鉢部にヘソ状の突起が残り、接合部分が観察できる資料である。円柱状に1cmほど延びており、この部分が脚部に納まっている。44・46は甕の脚台と思われる資料で端部は丸く納めている。44は内面頂部及び外面はナデ、内面はクモの巣状にハケ調整を施す。46は内外面共にナデ調整。45は鉢の脚台でなだらかに裾広がりを見せ、端部は丸く納める。端部内面から外面はナデ、内面ハケ調整である。

47は手捏ね土器の脚台部資料で脚部は低くて小さい。内面底部付近に指頭圧痕を留めている。色調は淡黄色で焼成は良いものの、軟質である。製塩関係の資料であろうか。

48・49は甕胴部で外面にタタキ痕跡を留める同一個体の資料である。外面は並行あるいは左上方にタタキ後ハケで調整している。内面は不分明であるが器表の細粒の移動痕からケズリが施されている。

須恵器(第18図50・51、図版16-1)

50・51は須恵器で法量から対となるものであろう。50は坏蓋で体部と口縁部際に段を有する。口唇部内面にも段を作り出す。頂部から体部上半にかけて回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転は時計回りである。51は坏身で立ち上がりは1cm程、接合部は幅広で1条のミゾを残す。底